

内外ニュース創業30年記念講演連続インタビューより
(平成14年5月1日発行 じゅん刊 世界と日本 No.970に掲載)

- 「利を求むるに道あり」の視点を — 52
泣き虫で内弁慶からガキ大将へ — 53
何度も失敗した入学試験と就職試験 — 60
人生の苦難や幸運は総て試練 — 64
弱冠27歳で新会社設立へ挑む — 69
団体交渉で三日三晩の説得 — 80
京都賞を設立し科学の技術振興を — 90
立派な老師に惹かれ得度 — 94
若者の特権は理想に燃えること — 99

内外ニュース東京懇談会講演より (平成12年3月29日開催)
(平成12年3月15日発行※発行日調整し掲載 じゅん刊 世界と日本 No.919に掲載)

- 確固不拔で真実に迫れ
—情報通信時代の経営のあり方— — 106
ネット関連事業に大きな関心 — 107
第二電々で初の新規参入 — 112
競争激化で厳しい経営 — 116
情報をビジネスにどう活用するか — 124
思い返してみたい不易と流行 — 134
人生の目的は布施の心 — 142

目次

巻頭言

夢を追い続ける素晴らしさ
=京都賞と稲盛さん=

清宮 龍 — 3

稲盛 和夫 講演録集 (復刻版)

内外ニュース創業30年記念講演より (平成14年5月13日開催)
(平成14年6月1日発行 じゅん刊 世界と日本 No.972に掲載)

- 人生について思うこと
—宇宙に存在する慈しみの心— — 10
運命と因果応報の法則 — 11
人の「三毒」は欲、怒り、愚痴 — 26
心を高めて心を磨く — 37
利を求むるに道あり — 43

内外ニュース創業30周年記念講演（平成14年5月13日開催）より

人生について思うこと

— 宇宙に存在する慈しみの心 —

京セラ株式会社名誉会長
内外ニュース顧問

稲盛 和夫

運命と因果応報の法則

稲盛でございます。内外ニュースの創業三十周年の大変記念すべき日に私ごと話が話をするというのは僭越極まりないことだと思えますが、清宮さんのほうからどうしてもという要請でございましたので、厚かましく出てまいりました。

ちょうど私も今年の一月で満七十歳になりました。また、京セラという会社を二十七歳の時、つくっていただき、四十三年が経ちました。売上げも一兆円を超える規模にまでなりました。また、約二十年前につくらせていただきました第二電電も、現在ではKDDIと名前を変えて、売上げが三兆円規模の会社になりました。そういう人生を歩んでいく中で昨今、人生について思うことがいろいろとあります。大変泥臭い話で、そんな話を皆さん方にさせていただくということは大変僭越だと思えますが、今日は

時間をお借りしまして、私の人生について思っておりますことをお話し申し上げて、皆さんのご批判に供したいとこのように思っております。

私は人生というものをどのようにみるか、どのように考えるかということは、一生を過ごしますのに大変なことだとかねてから思っております。人生のとらえ方によって、その人の人生の様相までもが変わっていくとまで思っております。

そこで、今から四百年ぐらい前、中国の明の時代に袁了凡（えんりょうぼん）さんという方が人生について書かれた『陰騭録（いんしつろく）』という本を引用したいと思います。その本は安岡正篤さんなどが『陰騭録を読む』や『運命と立命』という本で解説しておられますから、多くの方がご存知なのかもしれませんが、簡単にその筋書きをお話ししてみたいと思います。

今から四百年ぐらい前の話です。袁了凡さんは小さいころは袁学海とい

う名前でありました。学海少年の家は、お父さんを含め代々医者の家業としておられました。若くしてお父さんが亡くなられて、お母さんと学海少年の母子家庭でした。ある夕暮れ、旅の老人がその家の前を通りかかって、遊んでいる学海少年を見つけて「実は私は中国の南の国で易学を勉強して、それを極めた人間だが、『この地に袁学海という少年がいるので、その少年に易学の神髄を教えるように』という天命が下ったので訪ねてきた」と言います。老人にその日一日の宿を所望された学海少年は、お母さんに「旅の老人がみえた」と紹介します。

旅の老人はその夜、学海少年を前にお母さんに「この少年を医者にしようとお考えですね」と問うと、お母さんは「そうです。うちの家は先祖代々医者の家業としており、亡くなった主人も医者でした。この子にも医者になってもらおうと思っております」と答えます。すると、「いや、この少年は医者になりません。この子は科挙の試験を受けて高級官僚の道を歩むは

ずです。何歳になった時に郡の選抜試験を受けて何人中何番で通りましよう。やがて県の試験を受けて何人中何番で受かりましよう。その次に地方の大きな試験を受けて、その時には落ちるでしょう。その次に何歳の時にまた試験を受けて受かるでしょう」というようなことをその老人が少年の顔をみながら言うのを、少年は不思議に思っています。「やがて高級官僚に任官し、地方の長官として任じられて派遣されます。結婚はしますが、残念ながら子どもは生まれません。五十三歳で死ぬ、そういう運命になっています」ということまで、その老人が学海少年の前でお母さんに告げるのです。

実は、学海少年はその後、長ずるに及んでその旅の老人が言った通りの道を歩いていきます。それも何歳の時に何の試験を受けて何人中何番で通る、また、受からないというようなことも、すべてその老人が言った通りの人生を歩いていきます。やがて任官し、その老人が言った通りに地方の長官に任じられて派遣されます。今で言うちょうど南京の郊外であります。そこに有名な禪寺があり、雲谷禪師という素晴らしい老師がおられるというのを聞いて、袁長官はそこを訪ねていきます。

そこで老師の勧めで一緒に座禅を組むわけですが、袁長官があまりにも素晴らしい座禅を組むので、老師が舌を巻かれます。「お若いのにさすが長官になれるほどのことがあって、あなたは何と素晴らしい座禅を組まれるのか。あなたには雑念、妄念がありません。非常に澄みきった素晴らしい座禅を組まれるが、一体、どこで修行をされたのか」と老師が聞かれます。袁長官は「いや、どこで修行したというわけではありません。おっしゃる通り私には迷いがありません。なぜかというところ、子どものころに家の前を通りかかった旅の老人が私の運命を教えてくださいました。その後その老人が言った通りの道を歩いて今日まで来て、この地の長官にまでなりました。確かに結婚をしましたが、子どもは生まれていません。やがて五十